

田原市博物館テーマ展「没後50年 郷土の書聖 鈴木翠軒」出品リスト

会場 田原市博物館 企画展示室1

期間 2026（令和8）年8月8日（土）～10月4日（日）

作 品 名	年代	点数	所蔵	備考
万葉一首（巻3-250） 柿本人麿歌「たまもかる・・・」	1958（昭和33）年	1幅		双幅
万葉一首（巻3-253） 柿本人麿歌「いなびのも・・・」	1958（昭和33）年	1幅		双幅
李白詩「望天門山」より 「兩岸青山相對出 孤帆一片日邇來」	—	1幅		
願況詩「宿昭慶」より 「那知今夜長生殿 獨閉空山月影寒」	—	1幅		
「菜根譚」より 「風來疎竹 風過而竹不留聲」	—	1幅		
秋色遠	—	1幅		
李白詩 「送崔氏昆季之金陵」	—	6曲1隻		
李白詩 「月下独酌」	—	6曲1隻		
万葉一首（巻1-48） 柿本人麿歌「ひむがしの・・・」	1974（昭和49）年	1面		同作品、迎賓館
艷容女舞衣 酒屋の段	—	1面	津島市 教育委員会	
曾根崎心中 道行	—	1面		
桃源	1966（昭和41）年	1面		碑、伊良湖岬 生誕100年記念
人閑	1973（昭和48）年	1面		
万葉三首（巻20-4380・10-2333・20-4379） 大田部三成・柿本人麿・大舎人部祢麿歌	1951（昭和26）年	2曲1隻		風炉先屏風
書簡（松下芝堂宛）	—	1面	個人	
万葉一首（巻1-24） 麻績王歌「うつせみの・・・」	1961（昭和36）年	2幅	個人	「万葉の歌碑」揮毫元原本
万葉一首（巻1-24） 麻績王歌「うつせみの・・・」	1961（昭和36）年	1幅		「万葉の歌碑」揮毫元原本
夢	—	1幅	個人	
書簡（天野四郎宛）	1956（昭和31）年	1通	個人	帰郷時（肖像写真撮影ほか）の礼状
年賀状（天野四郎宛）	1972（昭和47）、1975年	2枚	個人	福江小回顧コメント記載
葉書（天野四郎宛）	—	1枚	個人	「万葉の歌碑」撮影依頼ほか
葉書（天野四郎宛・上村軍平宛）	1960（昭和35）年	1枚	個人	「万葉の歌碑」揮毫日程、場所通知
葉書（天野四郎宛）	1961（昭和36）年	1枚	個人	「万葉の歌碑」揮毫完成通知
書簡（天野四郎宛）	1961（昭和36）年	2枚	個人	「万葉の歌碑」揮毫作品変更依頼
白妙	1965（昭和40）年	1面		「白妙」収納箱揮毫原本
万葉一首（巻3-253） 柿本人麿歌「いなびのも…」	—	1面		
万葉一首（巻3-340） 大伴旅人歌「いにしへの…」	—	1面		

作 品 名	年代	点数	所蔵	備考
万葉一首（巻1-28） 持統天皇歌「はるすぎて・・・」	—	1面		
万葉一首（巻3-343） 大伴旅人歌「なかなかに・・・」	—	1面		
新月未離山	1963（昭和38）年	1面		碑、高野山
酔客満船	1960（昭和35）年	1面		
いろは歌	1976（昭和51）年	1面		絶筆
黄庭経（王羲之）	1946（昭和21）年～	1帖		
金剛般若経開題（空海）	—	1帖		
習字手本（はげしい雷鳴、風がはこぶ秋）	—	2枚		
作品下書（艷容女舞衣 酒屋の段）	—	3枚		
鈴木翠軒筆 万葉千首完成記念「白妙」 （複製）	1966（昭和41）年	100枚組		
甲種 小学書方手本 尋常科用 第一学年～第六学年（第二学年から上下2冊）	1933（昭和8）～ 1938（昭和13）年	11冊		
一条摂政御集歌（77）	—	1幅		
一条摂政御集歌（78）	—	1幅		
一条摂政御集歌（93）	—	1幅		
夏目漱石歌「良寛に手毬つかせる日永哉」	1963（昭和38）年	1面		
夏目漱石歌「塔五重五階を残し霞けり」	—	1面		
夏目漱石歌「君が名や硯に書いては洗ひ消す」	—	1枚		
夏目漱石歌「白雲や山又山を這ひ回り」	—	1枚		
日本藝術院賞賞牌 日本藝術院	1957（昭和32）年	1個		
日本藝術院会員任命状	1960（昭和35）年	1枚		
勲二等瑞宝章	1974（昭和49）年	1章		
筆、硯、墨、文鎮、水差	—	一式		
落款印（自用印）、肉池	—	一式		

*所蔵表記のないものは田原市博物館蔵

鈴木翠軒

明治22（1889）年～昭和51（1976）年

明治22年、渥美郡堀切村（現田原市堀切町）に生まれる。旧姓は長尾、本名は春視。大正5年、文部省習字科検定試験に合格し、8年に上京。丹羽海鶴に師事。昭和7年、文部省嘱託となり「国定甲種書方手本」を揮毫するため、昭和10年に公職を辞し、国定教科書の揮毫に専念、同13年に完結。昭和32年、日本芸術院賞を受賞、同35年、日本芸術院会員、翌年、日展常務理事となり、郷里の伊良湖岬に「万葉の歌碑（麻統王の歌）」を揮毫。昭和43年、第20回文化功労者、同49年、勲二等瑞宝章を受章。昭和51年逝去（87歳）。翠軒の書は、中国や日本古来の漢字や仮名の筆蹟を徹底的に追求し、自らの流派（翠軒流）をうちたてた。



鈴木翠軒と万葉の歌碑